バトルスピリッツ～恋する太陽と輝きの剣～

東雲楓

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

バトルスピリッツというＴＣＧを通して出会い、恋をした男女の物語。
カードプールはアルティメットバトルまで。
序盤はアルティメットバトル０１導入前からという古さで進行します。
禁止制限は投稿時に最新のものを用います。
文才はないです。
カード知識もルールもやばそうな部分がちらほらです。
それでもよろしければご一読くださると幸いです。
※Ｒ―１５タグは保険で付けておきます。

目次

第一話
太陽と輝きの剣の出会い。――1
早い話、男は単純なのだ。女性を前にすれば。――9
さぁ、放課後だ。――15
ゲートオープン、界放。――22
闇を照らせ、光の翼。――29
太陽よ、炎を纏いて龍と成れ――！35
――この負けは、多分一生の思い出です。――42

第一話
太陽と輝きの剣の出会い。

～～～♪

朝の7時。日差しが入って多少明るくなっている部屋に、けたたましい音楽――バトルスピリッツ・ブレイブの劇中ＢＧＭ”ブレイブ・メインテーマ”――が鳴り響いた。

それと同時に、部屋の隅のベッドの上がもぞもぞと動く。

～～～♪

４月上旬。

春という季節にはなったが未だこの時期の朝というのはほんの少し肌寒いと感じる者が多いのではないだろうか。

そしてこの時期の布団の中というのはとても暖かく、布団からぬけ出すのは至難の業だろう。

まぁ、今回の場合に限っては布団中の人物は今流れている音楽を楽しんでいるだけなのだが。

〜〜〜♪、Ｐｉ

丁度２ループ目が始まった瞬間、布団から一人の少女が起き上がり、そのままスマホを手に取り音楽を止めた。

そしてそのまま大きく伸びをする。

控えめだが服の上からでもしっかりと主張ができるほどの膨らみを突き出すようにした後、脱力する。

ほうと息を吐いた後、少女――龍海（たつみ）陽菜（ひな）――はベッドから降りた。

再び、伸びをする。１７０と少しの長身がぐぐっ、と伸びる。陽菜は何気に起きた直後の伸び－伸ばしている間の筋肉の緊張と、脱力した後の筋肉の弛緩による快感－が好きである。

もっとも、同時に自分の長身を実感もしてしまうので嫌いでもあるのだが。

身長１７０．２ｃｍ。

高校一年生最初の健康診断で出たこの長身とも呼べる身長は、陽菜のコンプレックスだ。

女子高校生の平均身長よりも遥かに高い自分の身長。

この身長の所為で色々と面倒なこと－端的に言えば、イジメの被害者－にもなった。

背が高い女というのはそういう意味では損な役回りになってしまうのを中学の３年

で実感してしまった陽菜は、
元から大人しい性格を更に大人しくしてしまうことになり……結局面倒なことは拍車がかかった。
そんな陽菜の心の逃避先が”バトルスピリッツ・ブレイヴ”と呼ばれるアニメだった。
主人公である馬神弾の姿、言動、そしてその苦悩。
その全てが龍海陽菜という人間を惚れさせるには十分だった。
気がつけば、ホビーショップで彼がパッケージの構築済みデッキを保存用込みで購入し、ポスターだって飾った。
彼が最後に操ったキースピリット、”光龍輝神サジット・アポロドラゴン”をなんとなく買ったパックから引き当てた時は思わず声を上げてしまったほどだ。
今思えば、陽菜にとっては初めての恋、その思いが叶うことはないのはわかりきっていたが、
この恋は忘れられないものとなった。
「おはようございます」
故に、今日も彼女は部屋に飾ってあるポスターに向かって挨拶をする。
陽菜にとって、馬神弾というキャラクターは太陽のように輝いているのだから。

挨拶の後は、いつもと変わらない生活がある。
学校指定のブレザー――スカート丈を伸ばした――に着替え、顔を洗い、簡単な朝食をとる。
玄関に行く前に忘れ物がないかをチェックする。
鞄の中に今日必要な教材、筆記用具、弁当、そしてなんとなしに持ち歩いているデッキがあるのを確認して、最後に生徒手帳を入れたパスケースを開く。
3重のスリーブに更にカードローダー用のプラケーススリーブに入った”光龍輝神サジット・アポロドラゴン”。
たまたま買った1つのパックから出たこのカードは、陽菜にとってはつらい現実から自分を助けてくれる宝物のようなものだった。
一目見て、微笑んだ後にパスケースを胸ポケットに閉まって玄関の扉を開ける。
暖かい日差しと、涼しい風が吹き抜ける。空を見上げれば雲一つない青空。
ああ、今日はいいことがありそうだ。陽菜はそう思いながら通学路を歩き出した。

高校生活が1週間も過ぎれば、ぽつぽつと出てくるのがグループである。
教室に入れば、既に何個かの人の塊がぽつぽつと出来ていた。
陽菜はそれを横目で見つつ、自分の席――中央列の一番後ろ――に座った。
「やっほ、おはよ」
座ったと同時に前の席の女生徒が振り向き声をかけてきた。
彼女――朱里（あけさと）翠音（すいね）――とは、比較的よく話す。
そもそものきっかけとしては、前後で席が並んでいたから挨拶した（された）程度。
それから休み時間は頻繁に話すようになり、そもそもとして香連は陽菜の身長を全く気にしなかったのが、陽菜の中で朱里翠音という少女の評価を上げていた。
「今日お昼は？」
「ん、学食かな…今日はそんな気分」
こんなとりとめのない会話をできるぐらいには、この二人は仲が良かった。
香連がそっか、と適当な返事をした直後、チャイムが鳴る。
ああ、退屈な一日が始まるんだな…。
そう思うと少しばかりやる気の温度が下がり、一時間目の授業が数学だと知ってさら下げた。

――――――

退屈――授業のレベルは上がっているので、ついていくのが厳しい――な授業が終わった昼休み、陽菜は学食へ向かっていた。

購買でパンを買ったほうが安上がりではあるのだが、比較的金銭に余裕があるときはなるべくならカレーを食べたい。

そんな彼女は、週に3回程度は学食でカレーを食べる。

ちなみに彼女がカレーが好きな理由は、お察しの通りである。

それに、彼女はこうも思っていた。

――なにか出会いがあるんじゃないかな。――

内向的な彼女ができる男女を問わない出会いを求める最大限の行為としても、学食で昼食をとるというのはしたほうがいいというのが彼女の考えだった。

イジメを受けていた彼女にとって、こういう場――人がたくさんと集まる場所――というのは良い思い出はない。

しかしながら、イジめられていた彼女は人間不信に陥ると同時に、自身の寂しさや孤独感といった弱さを識ってくれる人も欲していた。

だからこそ、彼女は比較的外に出るということをし続けている。
それは今回の学食であったり、休日の散歩であったりと様々だが、一貫して考えるのは、”なにか出会いがあればいい”。
そう、龍海陽菜という人間は案外にロマンチストなのである。

そういう地道な努力が実を結んだから、だろうか。
彼女はあまりにもベタな出会いをした。

食券を購入し、そのまま列に並ぼうとした際に何かとぶつかり、パスケースを落とした。
慌てる陽菜を尻目に、その何かは立ち上がってパスケースを拾う。

その何かは、男子生徒で。
その男子生徒は、身長が低くて。
そしてその男子生徒は開かれたパスケース――正確には、そこに入っていたカード――を見て目を細め。
一旦息を吐いてパスケースを閉じ、身長に見合った、でも男らしい声で言った。

「バトスピ、やってるの？」

これが、彼…進道（しんどう）　帯刀（たてわき）との出会いで。

太陽と輝きの剣の出会い。

早い話、男は単純なのだ。女性を前にすれば。

進道　帯刀という人間は、浮いていた。

高校一年生という時分にありながら、身長は１５５．１ｃｍと中学１年生の平均身長より程度しかない。

黒髪は肩のあたりまで伸びており、制服を変えてしまえばそのまま女子としても通用するのではないかと思わせられるほどには顔も整っている。

それでいて、その目つきは鋭く威圧感がある。

身長と顔立ちの所為で子供が背伸びしているようにしか思えないのだが、それでも大人を怯ませる様な目を向けてくることもある。

態度もそっけなく、人と群れることを嫌うかのように誰とも話すことはない。

よしんば話したとしてもそれは連絡等の事務的なもの程度。

そんな彼は高校生活から僅か１週間と少しでまるで腫れ物のように扱われるようになる。

故に、浮いている。

実際問題として、食堂に来てから今までもクラスメートとすれ違うことはあっても声

をかけられるようなことはなかった。
彼のクラスメートらとしてはもう暗黙の了解みたいなモノで、いつもの仏頂面を見て無関心を貫くことに決めていた。
彼は感情を表に出さない、話すだけ価値のない、マシーンのような人間だと。マシーンなのだから、いてもいなくても変わらない。関わる必要もなければ、むしろ関わらないほうがいい。
それが、進道帯刀のクラスメートの総意にして、現実だった。
だからこそ、だろう。
誰か――女生徒――にぶつかり、その女生徒が落としたパスポートを見て拾い渡すまでの間にあった表情の変化、そそしてその後の幾分か優しい声色で放った一言は、彼らを戸惑わせるのには一役買った。

――――――

「バトスピ、やってるの？」
そう言われて、陽菜は言葉を発する前にまず混乱した。
視線を下げると、目の前で自分のパスケースを差し出している誰か。

制服を見れば男子生徒だと解る。
ぶつかった拍子にパスケース落としてそれを拾ってもらうなんて。
ちょっとしたテンプレ過ぎて、頭が混乱した。
そんな混乱の中、次にその人物が発した言葉の意味を考える。
バトスピ。ああそうだ、彼はたぶんパスケースの中のカードを見たのだろう。
後生大事にするかのようにカードを持っているように見えてしまえば、その人物がそのカードゲームをやっているというふうに推測するのは確かに間違ってはいないだろう。
「あ、ぇ、その……」
だからこそ…言い淀む。
ここで期待される答えは、どんなものなのだろう。
陽菜自身としては、デッキは持ってるけど対人なんてしたことがなくさらに言えば馬神弾が好きなだけでゲームそのものに楽しさを見出しているわけではない。
やっているかと言われると限りなくＮｏに近いＹｅｓ。
そんな状態をどう説明しようか悩むことでさらに混乱。
その状態が数瞬――陽菜にとっては数秒――、思考回路がショート寸前になりかけたとき、彼女のお腹がくぅ、と可愛らしく鳴いた。

「「……」」

双方の間に、言い表せない沈黙が訪れた。方や視線を逸らし、方や顔を赤く染める。

そこで緊張がふっと解けた陽菜は、ありのまま話すことに決めて目の前の男子生徒からパスケースを受け取り話し始めた。

「やってると言われると、微妙です。デッキは持ってるけど、対人戦なんてやったこともないし……アニメ見てて、面白かったから」

陽菜がそう言うと、目の前の男子生徒はん、と何かを考える素振りそして、言い放った。

「……バトル相手を、探してたんだ。よかったら、やってみないか？」

渡りに船って、こういうことなのではないか？

目の前の女子生徒にバトルのお誘いをかけながら、進道帯刀はそう思った。

常々に母から言われていた「友達を作りなさい」という言葉を思い出し、目の前の女子生徒はその条件にぴったりと合致するような直感があった。

自分も最近やり始めた、バトルスピリッツというＴＣＧ。

それをやっている…というには語弊があるが、そんな人物。
対人戦は初めてだということは、自分と同じ場所からスタートすること、わからないところをお互いに話し合ったりもすれば会話のネタにもなる。
ゲーム中の駆け引き、ゲームが終わったあとの反省会、それ以外の雑談もそこから派生させていけば割といい線も行くかもしれない。
そういう意味では、やはり目の前の女生徒は初めての友人としてしは申し分ないと考える。
正直として、こんな打算的な考えで友人を作るというのは、何か違うと考える自分もいながら、きっかけというのはそういうものでいいのではないかと肯定する自分もいる。
結局は人との繋がりの最初というのはそういうものだというのは、いつの間にか帯刀が持ってしまった持論なのだから。
しかし、彼女を一目見た時に、仲良くなりたいと思ったのも事実なのだ。
後々からよく考えてみれば、一目惚れというやつなのかもしれない。
背が高く、姿勢も良く、顔立ちも整っていれば長く下ろされた黒髪。
可愛いと言うよりは、綺麗と言ったほうがしっくりくる。言ってしまえば自分の好みのような女性。

早い話、男は単純なのだ。女性を前にすれば。
「え、と。わかり……ました。いつ、ですか?」
そして、女性から肯定の返事をもらえれば、さらに嬉しい。
目の前の女生徒から告げられた言葉に内心安堵しながら、言葉を続けた。
「今日が暇なら、放課後ここで待ち合わせよう」
帯刀のその言葉に、女生徒は了解の意を示した。
そして二人はまた後で、と言葉を交わし各々行動をとり始める。
こと帯刀に関しては内心でやはりどこか浮ついていた。
初めての友人になれるかもしれない人物との出会い、それが自分の好みのような女性。
初めての対人戦のことを抜きにしても心の浮つきは抑えられない。
何度でも言おう。
早い話、男は単純なのだ。女性を前にすれば。

さあ、放課後だ。

放課後までの数時間、目の前の少女――陽菜――はあからさまに上の空だった。
前の席の唯一の友人が話しかけても、うんしか言わずに時折何かを思い出したかのように頬を染める。
授業中もこれなのだから、高校の授業のシステム的なもの――教師が説明するだけで充てられることは無い――には感謝しないといけないだろう。
まぁこれも仕方ない話なのかも、等と後ろから時折来る”今私すっごい浮かれています”なオーラを感じながら翠音はそう思った。
……話は、昼休みまで遡る。
昼休み、今日はカレーを食べると言って食堂に行った陽菜は何故かカレーパンを購入して早々に戻ってきていた。
混んでいたかカレーが売り切れだったのかどっちかだったのだろうとあたりをつけながら戻ってきた陽菜をしっかりと見ると、何かがおかしかった。
そう、どこか…浮かれている様な、そんなような。

いそいそと小動物のような動きでカレーパンを袋から少しだけ出して、はむ、と擬音が聞こえそうなほどに可愛く齧ると、何やら嬉しそうに微笑む。

何があった。どうした。あなたってこんなキャラだっけ？

翠音の思考は先ずそれで埋め尽くされた。軽いパニック状態に陥ったようなものである。

初めて見る本当に嬉しそうな表情。

時折頬を染めて、悶えるように震える体。

昼休みに出てから今の間は約８分。その８分で何が彼女をここまで頭がおかしい自体にさせたのだ。

（翠音、気になります。）

何だその気になります、って。頭おかしい光景に自分も壊れたか。

等と考えながら、丁度カレーパンを食べ終わったところを見計らって翠音は陽菜に聞いたのだ。

聞いてしまった。

「ねぇ、食堂で何かあった？」

その質問の陽菜の答えは、言い表すならただのノロケだった。

やれ背の低い男の子とぶつかっただの、やれその男の子が紳士的だっただの、やれそ

の男の子と放課後遊ぶことになっただの。
今時にそんな阿呆なことがあるのか、と思いながら翠音はその時盛大な溜息を吐いた。

そんな昼休みの珍妙な出来事を思い浮かべながら翠音は後ろの桃色光線ダダ漏れ少女のことを考えた。
きっかけなんて特になく、ただ後ろの席だから話しかけた程度の相手。
少々どころかかなり根暗な少女な印象はあるが、話してみると聞き手上手で飽きることはない。
その身長の所為で色々と辛い思いをしているのがなんとなくは察しがついたから、そこのことを話に持ち出すこともしない。
というより、外見で人は判断したくないというのが翠音の気持ちであり、対人関係の基盤の一つだ。
だから、龍海陽菜という人間に対する翠音の評価はちょっと喋るのが下手で根暗な、でも喋ると面白い友人、というものだ。
(しかし、まぁ。男の子に誘われた、ねぇ)
そんな友人が、男に誘われたというのは比較的驚きに値する出来事だ。

悪い男に騙されてるとかそういう可能性も否定できないけれど、そういうのに絡まれて成長することもあるはずだ。僅か一週間と少しにしか満たない友人関係なのだから干渉なんてするのは論外だとも考える。

ただ、まぁ。

少し経ってから、それとなく聞いてそこから相手を見定めてみる程度なら、大丈夫かも知れない。

総結論づけて、思考を切る。同時にチャイムが鳴った。

さぁ、放課後だ。

さぁ、放課後だ。

陽菜は気合を入れて食堂に向かった。特に気合に意味はないが、記憶が残っている中でのほぼ初めての”お誘い”というものに動転しているだけで、他意はないのである。

カバンを握る手が汗ばんでいるのを感じながら、食堂までの道のりを歩く。

食堂に向かうにつれて人の数は減っていくが、まだまだ時間も早いということでそれでも多くの人が残っている。

部活の勧誘をしている人、立ち話をしている人、それらをかき分けながら歩く。

いつもいつも人混みを歩くときは足が重いはずなのに、今日今現在に限っては一

歩々々が軽い感じがする、と陽菜は感じた。
食堂は放課後でもそこそこに賑わっていた。
椅子がありテーブルがあるこの場所は、教室に次いで生徒の中では癒しの空間のようなものなのだろう。
飲食も大丈夫なので飲み物を片手に会話に興じている生徒もちらほらと見かける。
そんな中で陽菜は件の男子生徒を探した。
身長が低い、黒髪。
それしか分からないがそれで十分だろう、それに言ってしまえば私は長身の黒髪。
探しやすさを考えると私ほど探しやすい人間もまぁ、この場では少ないだろう。
少しだけ、このコンプレックスに感謝する。したくもないが、今日は特別だ。
何故なら、探し始めて1分もしないうちにあの男子生徒がこちらに向かって手を振りながら歩み寄ってきたからだ。
「待たせた。探したか？」
そっけない言葉が来る。待たせたのはこちらなのだから、それは私の言葉のだけど。
こういうさりげなさが、男なのだろうか。妙な納得をする。
「今来たところ、です」
テンプレートな会話をしているな、と心の中で苦笑する。

ああ、なんだ、勘違いをしてしまいそうだ。
「なら、行こう」
そう言って、少し急かすように目の前の男子生徒は食堂から出る。
それを追いかけるように歩き始め、すぐに隣に並んだ。
デッキは、家？と質問する彼に、カバンの中、と簡潔に答える。
ん、と短い返事をした彼はそのままの歩調と声色で言った。
「実家が、カードショップなんだ。そこでいいか？」
……え？
待った。今彼は何を言った？
カードショップ、それは理解できる。そこでいいかという質問にも問題はない。やることはカードゲームだから場所的にも問題ない。
……実家という言葉が、つかなければ。
実家、イコール彼の家。経営しているのは、多分彼の親。
なかなかにハードルが高いのではないかと思う。ほんとにカードゲームだけなのだろうか？
思春期の初心な女特有――果てしなく自分自身の主観が入りに入った――の思考が陽菜の脳内を駆け巡る。思わず隣の彼を見た。

なんというか、純粋に何も考えていないように思える、顔。毒気が抜かれるような表情だ。

気にしすぎだと思い直し、大丈夫です、と返事をする。

そうだ、初対面の人間が遊びに誘われただけだ。そんなすぐにどうこうなんてありえない。

昇降口で一旦分かれて靴を履き変え、再度落ち合う。その間にクールダウンは完了した。何があっても私は狼狽えないという気概を心の中で完成させる。どうせショップの中には多くの人がいて騒がしいはずだ、そんな中で何かハプニングがあるはずがない。

さぁ、私はもう大丈夫。そう思った陽菜に彼が投げかけた言葉。

「今日は定休日で、客はいないから。落ち着いて遊べるよ」

その言葉に陽菜の気概は容易く崩され、ショップに到着するまで陽菜の思春期の初心な女の妄想は止まることをしなかった。

ゲートオープン、界放。

帯刀の実家、カードショップ「Ｈｏｂｂｙ　Ｆｏｒ　Ｙｏｕ」は学校から徒歩約２０分程度の場所に存在する。

地理的には小学校・中学校・高等学校の３つから包囲されているという素晴らしい立地条件だが、二階に自宅がある関係上住宅街にひっそりと立っているという、隠れた名店のようになっている。

自転車は置けるが車は置けない、でも住宅街なので基本徒歩でも大丈夫なその店は、そこそこに近所のＴＣＧプレイヤーが集まる、謂わば子供たちのコミュニティの場になっているのだ。

そんなショップに向かうための道のりを、帯刀と陽菜は会話もなく歩いていた。

そう、会話もなく。

帯刀としては、世間話をしたほうがいいのではないだろうか？等という考えもあり、幾度かそれを試みようとちらちらと隣の長身の女生徒に視線を向けたりはしているのだが……。

「……、……」

隣の長身の女生徒が、自分の世界に入ったかのように心此処に在らずという状態では流石にそれは憚られた。トリップが解ける瞬間があるのだがすぐさま次のトリップに入ってしまうのでまずタイミングを逃す。隙なんてありはしない。これが女の子というものなだろうか等と頭の中で学習しながら、まぁいいかと帯刀は諦めて思考を放棄した。

陽菜がトリップ状態から現実世界に戻ってきたのは、隣にいる男子生徒からの到着の合図からだった。改めて視線を男子生徒に向けた後、その建物を見る。

周囲の住宅街に溶け込むように存在するそれは、隠れ家と呼ぶにふさわしい佇まいをしている。唯一自己主張するようにある”Ｈｏｂｂｙ　Ｆｏｒ　Ｙｏｕ”と書かれた看板がそれを店だということを表していた。

「少し、待ってて」

隣の男子生徒にそう言われて、少し肩を震わせる。思考が現実世界に戻ってきたとは言えまだ覚醒状態ではなかった陽菜はその言葉に驚いてしまった。今ので完全に思考が覚醒したのでもうこんなヘマはしまい、と思いながら了承の返事をする。

男子生徒は建物の横に回ると、そこから建物の中に入ってしまった。あそこが家用の玄関なのだろう、と当たりをつけておく。いづれあそこから入れるようになるのだろう

か……、等という期待をしていたことは、後日気づいたことだ。

しばらくして、目の前の扉が開きそこから男子生徒が出てきた。普段着に着替えたのだろう。紺色のジーンズに灰色のパーカーという格好で迎えた目の前の男の子は、どうぞ、という一言と共に建物の中に迎え入れてくれた。

証明で明るくなった店内だろう場所をざっと眺めてみると、こじんまりしている割には広い印象を受けた。同時に６人程度が遊べる長机が２つと２人程度が遊べる机が１つ。あとはカードを陳列してある棚とレジカウンター。全体的に落ち着いた清潔感がある内装を見て、陽菜は雰囲気の良い場所だなと感じた。

こっち、と男の子に案内されたのはレジカウンター横の長机。長机にはプレイシートが２つと小さな青いモノがたくさん入った深さが無い箱が目に付いた。それがコアとコアケースだと解ったと同時に、お互いに向き合って座る。鞄をとなりの椅子において、中からデッキケースを取り出す。公式で発売されている、２重スリーブ４０枚を横に２つ並べて収納できるデッキケースだ、上の方にコアを仕舞っておける場所があるので便利だと思い購入したもの。目の前の男の子も同じものを使用している様だ。

お互いにデッキを取り出しながら、お揃いだななんて考えていてふと思った。そういえば、自己紹介をしていないのでは、と。これからのことを考えるなら名前ぐらいは知っておきたい、そう思って声を掛ける。

「「あの、名前は…」」

声が、重なった。どうやら目の前の相手も同じことを考えていたようで、それがどことなく嬉しい。少しの間、目が合うとなんというかむず痒さを覚える。心がくすぐったい、とでも言えばいいのだろうか。そんなことを思いながら、視線でお先にどうぞ、と先を促してみる。ここは男を立てるべきだと、自分の部屋の本棚の小説という名の参考資料には載っていた。

「進道。進道帯刀」

名前を聞こうと話しかけようとしたら声が重なり、視線が合って相手の顔に見蕩れた後に簡潔に自分の名前だけを言葉にした。思えば同じ年の女の子とここまで近い距離で話したことがあっただろうかと考え。いや無い、と変な反語表現で自己完結をしておく。

「龍海。龍海陽菜って言います」

そうしている内に相手からも返事が返ってくる。名前は覚えたけれど、どう呼んでいいべきか悩む。これが男子であれば適当なあだ名呼びや名前呼びが妥当だろうとも思うが、目の前の相手は女の子である。無難に苗字をさん付けが無難だろうか、なんて考えていると、目の前の女の子が爆弾を投下した。

「えと、帯刀君って読んでもいいですか？私のことも、陽菜で、いいですから」
少し思考が止まった。いきなり名前で呼び合うのはハードルが高いのではないだろうか、異性を名前で呼び合う関係というのはなんというか、男子の視点からすると”勘違いを起こしてしまう”というのが一般的だ。ちらりと目の前の爆弾発言女子を見る。表裏のなさそうな表情だが、何故か顔は少し紅いように見える。それを見て気が抜けた。以前母がリビングのめちゃくちゃでかいテレビで涙を流しながら見ていた魔法少女のアニメで「友達になるの、すごく簡単。名前を呼んで」というシーンがあったことを思い出し、そんなもんなんだと納得する。
「解った。陽菜はバトスピのルール、把握してる？」
納得したところでルール把握の確認。もう少しその綺麗と可愛いが綯交ぜになった表情を見ていたいという衝動に駆られないもないが、バトスピをする名目上出来ているので話を進めることにした。
「うん、基本的なところは。フラッシュタイミングは、怪しいけど」
名前を呼ばれて嬉しかったのだろうか、先程よりも紅く頬を染めた彼女の言葉を頭の中で咀嚼しながら、自分も彼女のようにならないように注意しながら言葉を選ぶ。
「ルールブックはここにあるから、確認しながらでいい。間違っていたら、指摘して巻き戻すから」

こちらの言葉に陽菜はこくりと頷く。名前呼び以外はまぁなんとかなりそうだと、自分のメンタルコンディションも考えながら、互いに準備をしていく。お互いのデッキをカット、シャッフルをして、ライフとリザーブにコアを置く。先攻は流れを見せる意味でもこちらが先に行うことを互いに了承し、初期手札として4枚を引く。

手札を見るとブロンズ・ヴルムが2枚、ダストワール、チャージドロー。やることは決まったかなと相手を見ると、相手も4枚の手札から視線を上げて準備が出来たことを伝えた。

「えと、あれ。言うのかな?」

と、陽菜が問いかける。あれが何かを察し、言葉を返す。

「カジュアルバトルだし、言わなくてもいいよ」

返した言葉に陽菜がホッとしたのを確認すると。それじゃあ、と声をかける。

あの言葉は言わないにしろ、これは言わないといけない。

「「よろしくお願いします」」

この言葉の裏で、互いに多分心の中ではこう思っているはずだ。

バトスピに於ける、戦いの合図。いつかは、声に出したいと思う。

とりあえずそれは頭の片隅に置いておき、心の中で言っておくことにしよう。

ゲートオープン、界放。

闇を照らせ、光の翼。

「スタートステップ」

目の前の彼、帯刀君のスタートステップ宣言でバトルが始まった。ドローステップを宣言した後にデッキからカードを引き、ドローしたカードを一瞥するとメインステップを宣言。手札のカードを一枚場に置いて宣言。

「ブロンズ・ヴルムをＬｖ１で召喚」

初めて見るカードに少なからず首をかしげる。陽菜のカードプールはかなり前で止まっているので今はこんなカードがあるんだ、程度ではあるが。それよりもカード上の英語表記が無いことのほうが陽菜にとっては驚きだった。その後、帯刀はターンエンドを宣言し、陽菜のターンに移る。

「スタートステップ」

コアステップ、ドローステップと続き、メインステップの開始宣言をした時点で手札を見る。ブレイドラ、イグア・バギー、サジッタフレイム、戦竜エルギニアス、そして今引いたブレヴドロー。なんともまぁ、どうしたものかと悩ませる手札になったと陽菜は思いながら、それほどに淀みなくプレイを進める。

「ブレイドラをＬｖ１、続けてイグア・バギーをＬｖ１で召喚。続けてマジック、ブレイヴドローを使用」

各々のカードを場に出していく。

「ブレイヴドローの処理をします。デッキから２枚ドロー。後にデッキの上から３枚をオープンし、ブレイヴがあれば１枚を手札に。残りは好きな順番にデッキの上に戻します」

そう言いながらデッキから２枚を引き、後に３枚をオープンする。牙皇ケルベロード、太陽龍ジーク・アポロドラゴン、サイレントロック。牙皇ケルベロードを手札に加えるとして、デッキに戻す順番をどうしようか悩んだところで、前半の処理の２枚ドローの内１枚を見てあまり悩むことなく決める。太陽龍ジーク・アポロドラゴン、サイレントロックの順番でデッキに戻した。次のターンのドローがサイレントロックで固定される形になる。

「ターンエンド」

エンド宣言をして一旦相手を見ると、少し驚いた表情をしている。何故だろうと首をかしげると帯刀は視線を彷徨わせながら言ったのは聞いた陽菜も改めて首をかしげるものだった。

「ん、なんというか、様になっていた。ほんとに初心者か疑うぐらいに」

様になっていた、のだろうか。自分では解らない。何度も何度もアニメ――ブレイヴを繰り返し――見ていて、ステップの処理も覚えていただけだし、この流れも手札と相手の場を見てなんとなくでやったものなのだ。だからこれが最善とは決して言えないと思う。

けど、まぁ、なんだ。そう言われるのは、悪くない。

そうは感じる。褒められて喜ばない人は滅多にいない。この場合は先輩に褒められているようなものなのでその感動もプラスされている。さて、目の前の彼はここからどう動くのだろう?

――――――

「じゃ、俺のターン。スタートステップ」

首を傾げる姿に気を取られていたのを、首を振って仕切りなおしてターンを進める。しかしながら本当に初心かと問いたい程にはスムーズなプレイングだった。そしてドローステップで引いたのはライト・ブレイドラ。こちらの手札の悪さがかなりやばいことになっているのを感じながら、このターンは動かないことを決めつつ手札を1枚手に取る。

「マジック、チャージドローを使用。デッキから2枚ドローし、その後デッキトップから2枚をオープン、その中で【強化】を持つスピリット・ブレイヴを全て手札に加え、残

りはデッキの上に戻す」
　ブレイヴドローみたいだねという陽菜の言葉を聞きながら、帯刀はまず2枚をドローする。ライト・ブレイドラと輝きの聖剣シャイニング・ソード。ここまでは理想通り。続けてのトップオープンの中身はサンピラー・ドラゴンとグローリー・ガードラー、2枚とも【強化】を持つので手札に加えられる。なんとかデッキトップ固定は避けられたことに安堵し、ターンエンドを宣言する。
　そして始まる、目の前の女の子のターン。淀みなくリフレッシュステップまでの処理をこなした後のメインステップで彼女は角獣ガルナールをＬｖ1で召喚した。
　ああ、なるほどと帯刀は関心する。先のターンで固定されたデッキトップはサイレントロックとジーク・アポロ、そのうちサイレントロックはドローステップで引いたので、今のデッキトップはガルナールで手札に加えられるジーク・アポロだ。本当に初心かと疑いたくなってしまうプレイングだが、素直にすごいと感じる。カードに愛されているな、とも感じる。
「ブレイドラをＬｖ2にアップして、アタックステップ。角獣ガルナールでアタック。角獣ガルナールＬｖ1・2の効果、デッキから3枚オープンしてその中の系統：星竜を持つスピリットかブレイヴを1枚手札に加えて、残りはデッキの下へ」
　そうして開かれたカードは太陽龍ジーク・アポロドラゴン、炎の楽園、サジッタフレ

イムの3枚。ジーク・アポロが手札に加わり、残りがサジッタフレイム、炎を楽園の順番でデッキの下に置かれた。サジッタフレイムがデッキボトムに行ったのは嬉しいがジーク・アポロの手札参入はご勘弁願いたかった。ケルベロードも見えている現状ではかなりのプレッシャーだ。しかしまぁ、それはまぁとりあえず置いておくとして、まずは。

「ライフで受ける」

ガルナールのアタックはライフで受ける。こうしないとコアがたまらないからだ。純正の赤デッキの宿命とも言うべきコア不足、こうでもしてなければ展開もできない。

その後、陽菜はターンエンドを宣言した。ブロンズ・ヴルムのＢＰ３０００がいい具合に牽制になったようで安堵する。

「スタートステップ」

しかしながら、どうにかして場だけでも荒らしておかないと安心はできない。手札の驚異度を鑑みればこのターンで勝つぐらいの意気込みを持たなければ、負けるだろう。

「ドローステップ……。ん」

そういう意気込みでの、ドロー。そしてドローしたカードは、相手の場を壊滅させるのにはもってこいのカードだ。この状況でのこのドローは、何か運命めいたものを感じる。デッキが勝てと言ってくれているようでとても頼もしい。手札も悪くはないし、コ

アもギリギリ、足りる。攻勢に出る価値は、十分にある。さあ、派手に行こう。
「メインステップ。ライト・ブレイドラをＬｖ１で２体召喚。そして……」
闇を照らせ、光の翼。
「輝龍シャイニング・ドラゴン、Ｌｖ１で召喚」

太陽よ、炎を纏いて龍と成れ――！

「輝龍シャイニング・ドラゴン、Ｌｖ１で召喚」
相手のフィールドに現れたのは細身のドラゴンが書かれたカード。
胸の赤いクリスタルが特徴的で、おそらくこれが、彼のデッキのキースピリットなのだろう。
コスト６ともなれば、大型で召喚するのに一苦労するのが
バトルスピリッツというカードゲームだ。
そして一苦労かけたモノというのは、総じて強い効果を持つ。
果たしてその予感は的中だったようで、
対面の相手はレリーフ加工されたそれに維持コアを乗せながら恐ろしいことを言った。
「召喚時効果で手札のブレイブカードをノーコストで召喚する。手札の輝きの聖剣シャイング・ソードをシャイニング・ドラゴンに直接合体（ダイレクトブレイブ）」
なにそれ強い、踏み倒しとかずるい。
思わずキャラを崩しかけるが、知ってるカードに似たようなマジックがあったのを思

い出し、
何とかそれは言葉にならなかった。
そう、これぐらいは普通。
北斗七星龍ジーク・アポロドラゴンだって踏み倒し効果だったから問題はない。
そう思った矢先に更にとんでもないことを言い出した。
「輝きの聖剣シャイング・ソードの召喚時効果。相手の場のＢＰ３０００以下のスピリットを全て破壊し、破壊した枚数分ドローする」
相手の場を荒らしながらドローする効果。
その”陽菜にとっては”破格に思える効果を告げられ、まず陽菜はこれは不味いと思った。
序盤のＢＰ３０００以下一掃は辛いものがある。
せっかくコスト軽減用に並べた小型がいなくなれば、次のターンからの立て直しがきついからだ。
しかし、ＢＰ３０００以下かなら序盤なら刺さりそうだが後半刺さりにくそう？等と、
冷静な部分の思考はカードの考察を始めていた。
しかしここで、さらに追い打ちがかかる。

「ここで赤の【強化】、”破壊効果の上限＋１０００”が乗る。ライト・ブレイドラ２体、ブロンズ・ヴルム１体、更にシャイニング・ソードのブレイブ時効果を併せて合計４つ。つまりＢＰ７０００以下の相手スピリットを全て破壊する」

後半でもちゃんと機能するようにデザインされていたようだ。

むしろ、だからこそのＢＰ３０００以下なのだろうとも考える。

ともあれ、私の知らない間になんかすごいカードが出てきている。

効果処理でカードをトラッシュ、コアをリザーブに移動させながら陽菜は時代の流れを感じた。

カードは水物とはよく言ったものだ。

さて、と一息ついて盤面を見る。

相手は４体のスピリット、うち一つはダブルシンボル。

対してこちらは更地。

まぁ手札はある。コアも、とりあえずは大丈夫そうだ。

先のことを考えても仕方がない、今はこの場を凌ごう。

多分、勝った。

相手の場が更地になっていくのを見ながら、帯刀は今後の流れを予想した。

先ず、サイレントロックがどこかのタイミングで飛んでくる。
防御カードが見えている以上は使わせたいし、この場なら切るしかない。
しかしサイレントロックはアタックステップを終了させるが場の数までは減らさない。
このターンで削りきれなくても、数で押し切れる。
防御札も掴んだことだし、さて、行こうか。
確実に削るためにまずはシャイニング・ドラゴンでアタックし、これを相手はライフで受けた。
このアタックが通ることは解っていたので、次のアタックに移行する。
ブロンズ・ヴルムをレストして攻撃宣言。これで相手のライフは2、射程圏内になる。
サイレントロックを打つなら、多分このタイミングだ。
さぁ、こい……！
「フラッシュタイミング。マジック、サジッタフレイムを使用」
――、は？
「合計ＢＰ５０００まで相手のスピリットを破壊します。対象はライト・ブレイドラ２体とブロンズ・ヴルム」
……。

サイレントロックだと思っていていたら、おっかないものが飛んできたでござる。
なんて馬鹿やっている場合か。
よもやサジッタフレイムが飛んで来るとは思わなかった。
1枚がデッキボトムに沈んだことで、選択肢から外れていた。
今度はこちらが更地にさせられる番になってしまう。
シャイニング・ドラゴンは残ったが、疲労状態で次のターンの防御には使えない。
フィールドを整え、出来ることもないのでターンエンドを宣言しながら、思う。
一気に状況が不利になった。
こういうことがあるから、カードゲームは面白いのだろう。
そして、公開されて手札に加わった2枚が、嫌でもプレッシャーを与える。
それは気になって調べた。さらに深く調べて、納得もした。
かつて、登場したばかりという状況の中でそれでも尚環境に食い込み結果を残し、
環境をガラリと変えたとまで言わしめた、ある組み合わせ。
それが見えている状況。
相手の手札の状況次第では、完全な形で現れるであろうそれ。
――これがやばいと言わずなんと言おうか。

乗り切った。
まず最初に感じたのは、窮地を脱したことの安堵感だった。
しかし次に思ったのは危機感だった。
デッキの底に眠った”最後の”サジッタフレイム、更地のフィールド、ギリギリのコア。
相手の手札は先のシャイニングソードの効果で増え、おそらくは防御札も握られた。
何より、あの効果を見せつけられては、おいそれと小型を並べるのは躊躇われる。
しかし小型を並べないことには防御にも不安が残るのは事実。
さて、どうしようかと手札を見る。
・戦竜エルギニアス
・サイレントロック
・牙皇ケルベロード
・ノーザンベアード
・太陽龍ジーク・アポロドラゴン
正直きつい、そう思いながらのドローはブレイドラ。
きついが、やることは一つしかない。
コアの数は9。

この手札なら、ベストな状態でフィールドに立たせることができる。
「ブレイドラ、Ｌｖ１。続けて戦竜エルギニアスをＬｖ１。そして――」
初めてアニメでそのカードを見た時は、身が震えるような感じがした。
主人公の後ろから彼を守るように現れたそれは、
フィールドに降り立った後に翼を広げ、咆哮。
その姿は正しく炎を操る太陽の化身に見えた。様々な状況で、彼と共にあったカード。
それが今、私と共にある。
さぁ
太陽よ、炎を纏いて龍と成れ――！
「太陽龍ジーク・アポロドラゴンをＬｖ１で召喚」

――この負けは、多分一生の思い出です。

「太陽龍ジーク・アポロドラゴンをＬｖ１で召喚！」

そう、これで決める。

そうは思ったものの、陽菜の冷静な部分はこれで決まるとは微塵と思ってはいなかった。

ただ、このカードを出したからには、勝つ。

そういう気概を持たなければどうにもならないという、一つの意地だ。

「続けて、手札の牙皇ケルベロードをジーク・アポロドラゴンに直接合体。さらにＬｖ２にアップ。不足コアはブレイドラとエルギニアスから確保」

元よりのコア不足も原因だが、先のシャイニング・ソードの効果を間接的に回避するためにブレイドラとエルギニアスには犠牲になってもらった。自分の場には合体スピリットのみ、立て直しはしにくい。

「アタックステップ。合体スピリットでアタック。……牙皇ケルベロードの合体時効果により、デッキを上から５枚破棄することで、ターンに１回合体スピリットは回復。……デッキから５枚破棄します」

一枚一枚、相手に見せながらデッキの上から5枚をトラッシュに送る。
1枚目：ブレイヴドロー
2枚目：砲凰竜フェニック・キャノン
3枚目：砲凰竜フェニック・キャノン
4枚目：星海獣シー・サーペンター
5枚目：ブレイヴドロー
……砲凰竜フェニック・キャノンとブレイヴドローが全部トラッシュに行った。
ちょっと泣きそう。
ともあれ、合体スピリットは回復済み。
次はアタック宣言後のフラッシュタイミングだが、どう出るのだろうか。
「フラッシュタイミング。マジック、ファイアーウォールを使う。自分の赤のスピリットを1体破壊することで、このバトル終了時、アタックステップを終了させる。合体スピリットを指定し、破壊。ブレイヴはフィールドに残す」
相手が使用したのはアタックステップ終了系のウォールマジック。
そういうのは白のカードにしかないものだと思っていたけれど、赤にもあったのか、等と思いながら、しかし”この”バトルは続いている。
「合体スピリットはダブルシンボル。ライフを2つもらいます」

残りライフは2。だが相手の場にブレイヴ、というよりはシンボルを残してターンを渡す結果になってしまった。
内心を悟られない様に、自分が優位だと鼓舞するように、ターン終了を宣言。
しかし、不安は消えない。
そして、不安は現実になる。

――――――

「スタートステップ」
さて、どうしたものかな。
とりあえずファイアーウォールで窮地を脱してみたが、
相手の場には回復状態の合体スピリットが依然として存在している。
現段階でＬｖ２のＢＰは１１０００、次のターンでおそらくＬｖ３のＢＰが１４０００。
そうなってしまうと手が付けられなくなるので、このターンで処理はしてしまいたい。
そんな考えの中ドローステップで引いたカードは荒天竜スーパーセル・ドラグーン。
……これなら。
「リフレッシュステップ、メインステップ」

今一度、手札の内容ととコアの数を把握する。
「よし、グローリー・ガードラーをＬｖ２で召喚。こいつはＬｖ２から【強化】を持つ」
これで、軽減は満たした。
「続けて軽減２、コスト３で荒天竜スーパーセル・ドラグーンを召喚。召喚時効果でＢＰ４０００……１チャージ追加でＢＰ５０００以下の相手スピリットを２体破壊できるが、対象がいないので不発」
あとは、強引だが突破する！
「輝きの聖剣シャイニング・ソードを、荒天竜スーパーセル・ドラグーンに合体。さらにＬｖ３にアップ」
対面の相手の表情が、わずかに歪んだのを感じる。
そう、こいつは――
「アタックステップ。合体スピリットで攻撃！荒天竜スーパーセル・ドラグーン、Ｌｖ２・Ｌｖ３のアタック時効果により、自分の場の【強化】を持つスピリット１体につきＢＰをプラス２０００。さらにＬｖ３アタック時効果により、合体スピリットに指定アタック！」
相手のスピリットを指定して、アタックを行える……！
「っ、合体スピリットでブロック。こちらのＢＰは１１０００。フラッシュありません。

……ケルベロードは残します」
ジーク・アポロドラゴンを破壊できたことに安堵しつつ。
相手の表情を見る限りは、手札にも今のところ逆転の一手はないと見える。
続けてグローリー・ガードラーでもアタックしておく。
相手はライフで受け、残りライフ2でこちらの合体スピリットの射程圏内。
さすがに意地がある。ここはこのまま押し通させてもらう――！

「スタートステップ」
ステップ開始の宣言をしながら、手札を見つめてしまった。
流石に、サイレントロックとノーザンベアードではあの盤面を攻略するのは無理がある。
ドローソースがデッキにないのが確定しているのも、まずい。
「ドローステップ……リフレッシュステップ」
ドローしたのはイグア・バギー。
この状況をひっくり返せるカードではないことに歯がゆさを感じる。
しかしながらやれることはやるし、敗北が見えていようと諦めるわけにもいかない。
相手にはブロッカーはいない。

ブロッカーを残さなかったのは、手札にどうにかする手段があるという事で、おそらくＢＰ破壊。
もしくは、先ほどのファイアーウォールがもう一度飛んでくるのだろう。
「メインステップ」
この手札で出来る、悪あがき。
「イグア・バギーをＬｖ２。続けてノーザンベアードをＬｖ２」
１つでもライフを削っておく。
ここで守りに徹しても、次のターンで焼き野原にできるのが相手のデッキのコンセプトだ。
倒れるなら、前のめり。
アタックステップに入り、ケルベロードで攻撃。
相手はフラッシュで２枚目のファイアーウォールを使用。
相手の場から、グローリー・ガードラーがいなくなったけれど、こちらのアタックステップは終わってしまった。
そして彼のターン。
「サンピラー・ドラゴンを召喚。召喚時効果でトラッシュにある系統：星竜を持つスピリットカード又はブレイヴカードを手札に戻す。輝龍シャイニング・ドラゴンを手札

に」

彼のキースピリットが手札に戻り。

「輝龍シャイニング・ドラゴンを再び召喚する。召喚時効果で、手札の輝きの聖剣シャイニング・ソードをノーコストで召喚」

前のターンの焼き増しのような光景で盤面を更地にされ。

「アタックステップ。輝龍シャイニング・ドラゴンでアタック」

ああ、負けたなぁと思いながら。

初めてのバトルで、慣れない部分もあって。

デッキにも応えてあげられてはいなかっただろうけど。

初めてのバトルがこれで良かった。楽しかった。それだけは本当だから。

「ライフで受ける」

――この負けは、多分一生の思い出です。